頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム 2011 年度派遣報告書
派遣期間 2011 年 4 月 9 日～2012 年 3 月 26 日
派遣先 ロンドン大学東洋アフリカ学院（イギリス）・社会発展研究所（インド）

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
東南アジア地域専攻 連環地域論講座
日本学術振興会特別研究員(DC2)
飯田玲子

1. 研究テーマ

報告者は、インド西部マハーラーシュトラ州の民俗芸能である、タマーシャー劇の変容（特に 19 世紀後半から現代にかけて）を、インドにおける都市文化の変容の文脈で明らかにする研究をおこなっている。現在タマーシャー劇は、インドの西部において、都市文化として成長しつつあり、従来は農村を中心に演じられる芸能であったタマーシャーが、現在では都市はもちろんのこと、海外でも公演されるに至っている。この背景には、1991 年のインド経済自由化以降に新たな中間層が出現したことが関係していると考えられる。彼らは、近年になって農村から移住し、農村との繋がりを持ちつつ都市で活躍の場を見いだそうとしている新興中間層の人々である。 新興中間層は、親族・カーストや知人・友人などの関係性を基盤に、農村、都市、海外をつなぐかたちで活発な社会経済活動を展開しており、インドの経済的首都といわれるムンバイを擁するマハーラーシュトラ州では、こうした新興中間層を中心にタマーシャー劇の人気が大きく高まりつつある。現在タマーシャーは、農村と都市と海外を繋ぐような人々の登場および、メディアの変容、社会の変容によって、新しい都市文化へと作り直されていると考えられる。

【写真1 ロンドン大学東洋アフリカ学院】

今回の派遣では、イギリスでは主に歴史資料の収集および読解と並行して、南アジア研究、パフォーミング・アート研究の議論についての学術交流をおこなった。インドで

は、政府関係機関へのインタビューや、フィールドワークをおこなった。

2. 派遣の内容

「イギリスへの派遣」

2011 年 4 月～2012 年 3 月末まで、イギリスおよび、インドへ派遣して頂いた。イギリスでは、4 月～9 月までの間、ロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）にてアウトプット研修と並行して、大学内の豊富な文献資料にアクセスすることができた。また、SOAS の近辺には、UCL(University of London)や、Kings Collage、大英図書館が位置しており、文献収集や様々な分野の研究者との交流をもつ事ができた。アウトプット研修では、アカデミックライティングを重点的におこなった。研修中に大学から出される課題エッセイのほかにも、報告者自身の研究についてのエッセイを書き、添削およびコメントをして頂く機会にも恵まれた。

【写真 2 大英図書館】

「インドへの派遣」

9 月中旬から 11 月末までは、報告者の研究対象地域である、インド・マハーラーシュトラ州ムンバイ・プネーにて、フィールドワークをおこなった。ムンバイでは、National Centre of Performing Arts にて、現地研究者と学術交流をおこなった。また、同研究所の図書館にて、文献の収集をおこなった。プネーでは、報告者の研究対象であるタマーシャー劇の担い手および観客、NGO 団体へのインタビュー及び、劇場での参与観察をおこなった。また、デリーの文化交流評議会(ICCR)では、文化推進部門の担当者へのインタビューをおこなった。

【写真 3 インド文化交流評議会(ICCR)】

「イギリスへの派遣 2」

2011 年 12 月 21 日から 2012 年 3 月 26 日までは、再びイギリスに滞在し、研究活動をおこなった。SOAS の図書館や大英図書館にて文献収集および読解と並行して、大学の公開セミナーや、研究会へ出席した。また、エディンバラ大学でも、セミナーや研究会に参加した。エディンバラ大学では、教員だけではなく、研究対象や地域が近い若手研究者と議論する機会にも恵まれた。

【写真 4 エディンバラ大学】

3. 派遣中に印象に残った経験

これまで、インドへは複数回渡航してきたが、普段歩き回っているインドの都市（ムンバイやプネー）の都市の成り立ちや生活が、旧宗主国であるイギリスの影響を受けて成立していることが実際に感じられ、とても印象に残った。また、イギリスでは、現在もインドとのネットワークを持つ、インド系移民の人々から話を聞く機会にも恵まれ、報告者の研究の一つでもある、インドの農村や都市、海外を繋ぐネットワークについてのデータを得ることができた。

4. 目的の達成度・反省点

イギリスおよびインドへ派遣して頂いたことによって、南アジアおよびパフォーミング・アート研究の最先端の議論に触れられたことや、貴重な歴史資料を収集・読解することができた。これは、報告者の今後の研究および博士論文の執筆をおこなうにあたり、貴重な財産となった。また、積極的にセミナーや研究会に出席し、議論や自身の研究へのコメントを頂くなどの形で、海外の研究者とのネットワークやコネクションを創ることが出来たことは、最大の収穫である。

しかし、事務的な手続きの遅延や不備などによって、頭脳循環事務局の方や担当教員の方々に多大なるご迷惑をおかけしてしまった。この派遣が、報告者のこれからの研究人生において、どれだけ有意義であったかを考えると、各方面に奔走してくださった先生方や、事務の方には感謝しても感謝しきれない。無理なことや、自分勝手なこと、本当にご迷惑をおかけしました。そして、1 年の派遣期間に渡って支えてくださって、本当にありがとうございました。

5. 今後の課題

今年度の派遣を通じて得た成果の一部は、既に 2011 年 12 月におこなわれた INDAS の国際会議、”Media and Power”や他の研究会などで発表おこないはじめている。今年度は、インドでのフィールドワークをおこないデータを収集し、2011 年度派遣を通して得られた成果と共に、博士論文の執筆に着手する。また、頭脳循環での派遣を通じて得られた海外の研究者との繋がりを、今後も保持しながら研究成果を広く世界に発信していく。